

雨の信州路

原

期日 十日四日ー十月八日

参加者 小島 岩根 原

コース

(四日) 新宿ー新島々(夜行)

(五日) 新島々ー奈良川渡ダムー東新高

原YH

(六日) YHー東新山頂ーYH

(七日) YHー野巻峠ー長峰峠ー期田

高野(民宿)

(八日) 民宿ー木曾新島々新宿

(ここは松本電鉄の新島々駅。我々と共に降りた

乗客は、皆、上高地や東新山頂へ行くバスに乗り

込んでしまい、駅にいるのは駅員と我々だけであ

る。我々は、バスという乗物の誘惑を断ち切り、

これから始まるサイクリングを楽しみにしながら、

明るくなるのを待っているのだ。

「じっとしていても仕方ないから組み立てるが。」

「そうだな。めんどうくさいことは先にやっしま

おうぜ。」

といった訳で、自転車を組み立てることにする。

(ガチャ、ガチャ。カタン、コタン。)

すると突然、「ガッタン」という大きな音と共に

岩根の声。

「あ、シートベン、折ってしまった。」

丁度、僕がスペアを持っていたので、問題はなか

「たのであるが、岩根の手付きを見てみると、  
何となくあぶな。かしい。たいじょうぶかな  
と思っっていると、またもや「カッ4ン」

「あ、あ、また折れた」

「え？ 股が折れた、て？」

「ちかう。シートピンがまた折れたんだよ」

「ナント。彼は、十分間で二本も折、てしま、

たのである。もうスペアはないので、急場し

のきに、カンテイブレーキのネジを使用する

ことにする。(彼は、今もニルカ気に入、て

いるようだ。)

や。そのことで組み立てを終えたが、この

岩根のキョンボは、我々(特に彼)の未来を

暗示しているのである。空には、雨雲が深く

垂れこめている。

朝八時頃出発。柏核タムまでは何とか持ったの  
であるが、それを過ぎた頃からポツリポツリ。こ  
れはやばい、急がなければ、と思っ、っていると、

「ネエノ、モヨオシランマッタ」

と、岩根が言うのである。そこで小島が、

「エマ、サッキ、エキデスマセタバカリナノニ」

雨がだんだん強くな、てきたので、雨宿りを兼ね

て近くのドライブインへ。ここに三十分程いたの

だが、その間に、彼は○回往復したのである。そ

してその都度、ニコニコしながら戻、てきて、今

のは真直であったが、ハネ直だったとか話すの

である。彼のあの細い体の中に、どうしてそんな

に溜ま、っていたのか、本当に不思議である。

トンネルの長い道なので、雨が降、ていても

どうにかま、るこ、か、てま、るが、台風によるものら

しく、土砂降りになる。そこで、予定を変更して、東鞍高原YHに走ることにする。ここが、国道一五八号線と別れたところで、も根が、「パンクのめたり」と言いたす。幸い、トンネルが近くにあって、たので、その中で修理をしたが、パンクの場所がよく分からな。そこで、水濡まりで調べたのであるが、やはり分からな。しばらく、グズグズして、結局、虫ゴムが悪いということになる。

途中、揺って建て小屋で仮眠し、ずぶ濡れになってYHに到着。雨の中の上りは非常に疲れる。屋根の存在が、これ程までにすばらしいとは、と思ひながら、ベッドに。

次の日は、昨日の雨が上がり、何となく晴れてきそうな天気である。そこで、自転車

捨て、東鞍山頂へ登る。

本当にすばらしい景色である。空は快晴。下の方は、まうと雲海が広がり、所々から山が顔を出している。そして紅葉もすこい。

「今まで生きていてよかったなあ。」

「この景色だけで、高いお金を出して東京からやってくる来た甲斐があ、たなあ。」

「みんなに見せてやりたいなあ。」

「東鞍パンカ〜イノ。」

しかし、山頂は喫煙中である。僅かしかない山頂は、人でいっぱい。セ、かくの三六の度の眺望もたいなしてある。

さて、次の日は、今回のハイライト、野暮、長峰越えである。朝九時にYHを出発し、東鞍スパー林道を奈川まで走る。そこで、燃料を買い込

んで、いよいよ野麦峠へ。

この峠の上りは、大きな石がゴロゴロして  
いて、ち思い出しでも、もつとする。(千田や  
るから、と言われども、二度と上りたくない。  
一乃田なら考えるが…)非常に乗りにくいの  
だ。それでも、岩根は体が軽い為か、先に行  
ってしまふ。うらやまし。

峠で食事を済ませ、舗装道を下っている  
いやないやな雨が降り出したが、予定通り長  
峰峠へ。この峠への道は、途中、上りのきつ  
くなる辺りから、すばらしい道が続くが、峠  
からの下りは、ひどい砂利道である。岐阜県  
と長野県の境いを、まざまざと見せつけられ  
たのである。

ところで、さすが東工大生と思える岩根の

言葉が、小島との会話で生まれたのである。

体面にかかわることなので、あまり詳しくは書け  
ない。(お酒を飲ませてくれたら…)。

「もうすぐ〇〇〇〇があるよ」「ええ、そんなふ  
うに言うの?」「そうだよ」「ええ、僕、ず  
と前から、〇〇〇〇〇〇と言うのかと思っていて、  
「ハカたなあし」「……。余計な事、言うんじ  
ゃながった。小島君、みんなにハカにされるから、  
たま、ててね」「さあ……」。

以上であるが、僕は直接聞いてないので、すべて  
想像して書いたものである。

最終日は、朝からすこい雨。走る気力が全くな  
くなってしまい、由田高原から木曾福島まで走っ  
て、輪行する。とうとう、あのきたない東京へ  
帰らなくてはならぬ。